

運の拾い方（第3回）

2022.02.11 記す

1 運も不運も人を通してやってくる

①人の運は他人との係わり合いに深く影響されています。人の出会いが、ときには幸運をもたらし、ときには災害をもたらします。

交際の恐ろしさは、付き合う人の良し悪しがわたしの運命をも変えてしまうことです。日ごろ付き合う人はよくよく吟味しなければなりません。運も不運もすべて人を通してやってくるのですから。

②どんなに才能に恵まれた人でも、自分ひとりの力で成功した人などいません。

みな、上司、同僚、取引先、顧客、知人などの引き立てがあって道が開けたのです。身近な人が運を運んでくれるのです。

③わたしにもこんな経験があります。

それまで勤めたアメリカ系の法律事務所を辞めて、独立・開業したときのことです。事務所の経費を考えると、30代で開業するのは冒険でした。

しかし、オフィス物件を探し始めた頃、全く予想外のことが起きました。

先週まで揉め事の交渉で激しく対立していた相手方の弁護士から、提携の申し出があったのです。和解が成立したとはいえ、これには驚きました。

交渉過程で激しいやりとりがあったため、わたしは相手の弁護士に必ずしもよい感情を持っていなかったからです。

多少時間はかかりましたが、結局、費用分担で提携することになり、大いに助けられました。

④しかし、これはほんの序の口でした。老齢になって振り返ってみると、似たような経験が山積しています。

「自分は若いときから努力してきた、頑張ってきた、そして今の自分がある」。

長い間わたしはそんなふうに思っていました。しかし、それは全くの思い違いでした。

年をとつてから振り返ってみると、多くの人に助けられていたのが分かります。

他の人の応援がなければ、仕事を続けることは不可能でした。

ひとりでできることは、たかが知れています。仕事は顧客がもたらしてくれます。運は他人を通してやってきます。

⑤考えてみれば、就職・結婚・転職など、人生の大事には全て偶然が大きく作用していました。自分で努力した結果、思い通りになったわけではありません。大きな枠組みで見ると、偶然による人との出会いが決定的でした。

よく「自分の力でのし上がってきた、社会の階段を上ってきた」そう思っている成功者が多いのですが、それは誤解です。

2 出会いは職場から始まる

①われわれは、仕事を通じて長い間に多くの人と出会います。チャンスは、結局、人を通してやってくるのですから、多くの人に接すれば必ずチャンスに出会います。

いつかは分かりませんが、遅かれ早かれ、必ずよい出会いがあります。

チャンスに出会わない入間は一人もいない。それをチャンスにできなかつただけである。（アンドリュー・カーネギー）

②こういうと何か特別な出会いが必要なようですが、そうではありません。出会いは仕事や生活の現場に転がっています。仕事を通じての出会いは、人生で最も大切な出会いの一つです。今仕事についているのでしたら、職場の即戦力になることが最初のステップです。

③日々の仕事をコツコツとこなし、些事・雑事に手を抜かなければ、いつか人の目にとまります。世の中には手抜きをする人が多いからです。

小さな仕事でもキチンとこなすと、次の仕事がきます。次の仕事をしっかりとこなすと、さらに面倒な仕事や人のいやがる仕事が持ち込まれます。

仕事を頼まされたら、たとえ「自分の担当ではない」と思っても「難儀だな」と思ってもできるだけ引き受けたいものです。

④そのうち、周囲の見る目が変わってきます。「〇〇さんに頼めばなんとかなる」と噂になり、大きな問題が起きたときに、「一度〇〇にまかせてみよう」ということになります。こうして、チャンスは拡がり自分も成長します。

「〇〇は仕事ができる」という噂は、しだいに他の部署にも拡がります。やがて取引先や社外の人も知ることになります。

⑤これは仕事一般に通ずるルールです。

よい仕事を積み重ねて結果を出す、そうすれば口コミの評判が立つ。それが「運は人を通してやってくる」ことの意味です。

しかし、そのためには絶え間ない研鑽が必要で、それなくして「棚から 牡丹餅^{ぼたもち}」を期待するのは邪道です。あちこちに名刺をばらまくことではなく、よい仕事をすることこそ最上の紹介状です。

3 上司の期待にこたえる

①鉄鋼王アンドリュー・カーネギー(1835- 1919)は、カーネギー財団やカーネギーホールを設立した、史上2番目といわれる大富豪です。

始めは貧困、無学、人脈なしの「ゼロからの出発」でした。

②彼は、貧しい織物職人の子としてスコットランドの片田舎で育ちましたが、生活が苦しく、両親に従ってアメリカへ移住し貧民街に住みました。

13才のとき、綿織工場で糸巻きの仕事につき、夜明け前から深夜まで働きました。

釜炊きに変わった後も、つらい経験の連続でした。

暗い地下室で蒸気釜と取り組んで石炭の塵でまくろになり、釜が破裂する夢にうなされる始末でした。

③さらに糸巻きを油の壺につける作業に変わりましたが、油の臭気で吐気がして、朝食も昼食もろくに食べられず、夕食のときにやっと食欲ができる始末でした。

しかし、彼は腐りませんでした。

④彼がチャンスを掴んだきっかけは、字が上手だったからでした。

悪筆だった親方は、たまたまカーネギーの字を見て、請求書の作成を頼みました。カーネギーは苦労して何とか見栄えのよい請求書に仕上げました。

カーネギーは計算も得意だったので、やがて親方から勘定書の作成も頼まれます。これに力を得て、カーネギーは夜学に通って複式簿記を学びました。

⑤こうしてスキルを身につけたことがきっかけで、過酷な作業現場からデスクワークへ抜け出すきっかけを掴みました。

その後は、電報配達、電信士など次々と転職を繰り返し、やがて実業家として大成功を収めます。

⑥後年、カーネギーはこう回顧しています。

高い地位にある人に個人的に認められるということは、青年にとって人生の闘争にすでに半分、勝を制したことになるといってよいであろう。少年はみな、自分の仕事の領域を超えて、なにか大きなことをめざすべきである。なにか上司の目にとまるようなことをやるべきである。

⑦ではどうやってチャンスを掴むのか？　若い時はその方法が分からずに戸惑うものです。しかし、道を開く方法は意外に簡単です。カーネギーのように、まずは上司に認められることが最初です。その後、別の仕事で試され、やがて大きな仕事を任せられることになります。

このように職場で運を拾うためには「認められ、試され、任される」というステップを踏むようです。

4 「夢追い人」の考え方

①カーネギーのエピソードは大きなヒントを与えてくれます。

運は足元に転がっているのです、山の彼方にあるのではありません。日々の努力をしないで、「自由な職場でよい上司の下で働きたい」と夢見るのは考え方違います。

そのことをわたしは、20代半ばで痛感しました。ないものねだりをしては、運は遠のくばかりです。

②「求めれば得られる」とよくいいます。しかし、それを得るために険しい山を登らなければなりません。よく、キラキラ資格、キラキラ職業を夢見て、急に思い立ってあちこちぐるぐる走り回わる人がいますが、こういう人たちは何も得ることはできません。

求めるを得るために、絶え間ない精進が必要です。

「自分にはもっとふさわしい仕事がある」とか、「わたしはこんなところでくすぶっている人間ではない」とか、そんな夢を追うのは20代の半ばまでです。

③バタバタと動きまわっても無駄な努力です。思いは持続しなければなりません。長続きしなければなりません。生活の一部として努力を続けることが大切です。

生きていくことは仕事です。夢ではありません。

④明誼みょうせん（789-868）というお坊さんの修業時代のエピソードがあります。

外出しようとしたとき、急に雨が降り出しました。ひさしの下で雨がやむのをぼんやりと待っている時、ふと足元の大きな石に気が付きました。いつも雨垂れに打たれていますとみて石に穴があいています。

難しい唯識^{ゆいしき}を学んでいて自分の才能に迷いを抱いていた明詮は、このときふと悟ったのです。雨の柔らかい水滴さえ、堅い石を穿つ！　このように、日々コツコツと励めば難しい仏法も理解できないことはないだろう。明詮は、こうしてお坊さんとして生きる覚悟を決めたのです。

⑤ふわふわとした夢をみて、今の仕事に不満をいっても決して運は拾えません。不満をいうだけで、スキルをつけるための努力をしない人は、運を拾うこともできません。

こういう不平不満家は、夢を実現するためにどれだけの時間がかかるか、努力が必要かの視点がすっぽりと抜けています。

⑥職場や上司の不満をいったところで、自分の力がつくわけではありません。職場への不満と自分の実力の向上とは何の関係もないことです。不満をいうだけで、スキルをつけるための努力もしない人は、彼らは、むしろ自分から運を捨てているのです。

「自分にはもっとふさわしい仕事がある」とか、「わたしはこんなところでくすぶっている人間ではない」とか、そんな夢を追うのは20代限りです。

⑦30代になつたら「遠くの大きな夢」を追ってはなりません。そういう人はたいてい挫折します。

白昼夢をみて、今の仕事に不満をいっても決して運はやってきません。

職場に不満があるのなら、むしろそれをきっかけにして、スキルを身に付けるために行動するべきでしょう。不平不満家は、夢を実現するためにどれだけの時間がかかるか、努力が必要かの視点がすっぽりと抜けています。彼らは人生を捨てるようなものです。

⑧ただし、今の環境がブラックなら、すぐさま転職を考えるのが賢明です。

ブラック企業、ブラック職場、ブラック上司の下でコツコツと力を蓄えても、生かす術はありません。そもそも職場の仕事観・価値観がおかしいからです。部下を使い捨ての道具としか思っていません。

こんな職場では、どんなに頑張っても、自分が潰されるだけです。外から見ても分りませんが、日本社会ではブラックな職場がまだまだはびこっています。長居は無用です。

5 仕事のスキルを身につける方法

①実社会に出てまず学ぶべきは、仕事にすぐ役立つスキルを身につけることです。しかし、それは実務に役立てばよいので、何も高度のスキルでなくてもよいのです。カーネギーのように、字がきれいというのは、当時は立派なスキルだったのでしょう。今なら、英語がちょっとうまい、パソコンに詳しい、ソフトの使い方を知っているなども、立派な即戦力になります。現場とはそういうものです。実力といっても、その職場における相対的なものです。キラキラした資格や学歴は現場の即戦力にはなりません。

②まずは即戦力をつけながら、少しづつ力を蓄えるのが現実的な道です。

年齢や現状に見合った範囲内で、できるだけのことをするべきなのです。

「遠くの大きな夢」ではなく、「目先の小さな目標」を立てて進むのがよいのです。そうすれば、達成感もあります。

無理しては長続きしませんし、達成感を得ることもできません。途中の節目節目で「小さな達成感」を感じなければ、苦しいだけです。

③高いスキルを身につけようと大上段に構えなくとも、まずは職場でなくてはならない人になればよいのです。担当する仕事のプロになると自分の居場所ができます。大きな組織でも、毎日ともに仕事をする仲間はせいぜい20～30人です。ですから居場所を見つけるのはそう難しいことではありません。

「余人をもって代え難し」と思われる人になります。代わりがいる人といない人では存在感がまるで違います。代わりがいない存在になれば道は開けます。

④たとえば、同僚よりちょっと英会話が上手になれば、職場での受けも違います。手紙の翻訳や外国人の接客を頼まれ、会議に参加する機会が増えるなど、仕事が広がってきます。そうなればいっそ英会話に身が入り、さらに仕事が広がる好循環が始まります。英会話に限りません。たとえ自動車免許のような小さなスキルでも、未来を開く力があります。

⑤わたしも仕事必要なスキルを身につけるため、時間と費用を使いました。

20代には自動車免許をとり、30代に英文タイプと英会話を学び、40代にはワープロ、50代にはパソコン教室に通い100時間コースをとて基礎から学び直しました。

といって、わたしがとくに努力家だったわけではありません。どれもこれも日々の仕事に

どうしても必要だったからです。

⑥実務知識を得るためにには、多くの費用と時間を費やさなければなりません。だからこそ重宝されるのです。

リストラ、左遷、倒産、病気など、不幸は突然にやってきます。長い人生の間には、有為転変^{てんぺん}があり、ひとたび得た職も失うことがあります。職は失っても、身についたスキルは失うことがありません。一生の宝です。

社会に出てからも精進を続けることが大切です。人生は一生をかけた修行です。日々の努力こそ世を渡るパスポートです。